

## 生物多様性推進参与 [2020年～現在]

## センター・協議会 20周年に向けての期待

熊澤 慶伯

名古屋市立大学理学研究科 教授

2020(令和2)年4月に生物多様性推進参与の職をお受けして以降、なごや生物多様性センター(以下「センター」という。)となごや生物多様性保全活動協議会(以下「協議会」という。)の活動を見守らせて頂いています。センターの皆さんとは毎月の定例会議で様々な議論を交わしています。これまでに関わった主な取り組みとしては、センターの機関誌「なごやの生物多様性」の編集体制の刷新があります。

機関誌は2014年2月の創刊以来、毎年1巻の発行を重ね、2021年3月発行の第8巻では19論文・158ページの大部となっています。論文の著者は、センターの専門員・推進員を始め、大学の研究者や保全活動に携わる市民など多岐に渡り、名古屋市における生物多様性保全活動の活発さを示す内容となっています。ただ、論文の目次を読むと、固定されたメンバーからの投稿が多いことに気付きます。生物多様性の調査研究や活動は、少数の専門家が携われればよいものではありません。中高生・大学生などの若者を含めた市民、行政や企業の関係者などあらゆるステークホルダー(広い意味での利害関係者)を巻き込んだ取り組みとして盛り上げていくべきです。生物多様性の主流化(生物多様性に配慮した社会経済への転換)という大目標からすれば、行政や企業の皆さんからの投稿を期待したいですし、高校生の部活動の成果もどんどん機関誌に発表してほしいと思います。

昨年度の議論を経て、機関誌の編集会議が立ち上がりました。今後は編集長(生物多様性推進参与)、副編集長(センター主幹)、編集員(センターの専門員・推進員や外部有識者)が機関誌の企画・編集・発行・宣伝に責任を持つ形で、機関誌の運用が行われます。機関誌に掲載された論文は、図書館などで機関誌の冊子体を閲覧するか、名古屋市のウェブページ内からPDFファイルを無料ダウンロードして読んで頂けます。しかし、こうした方法だけでは、機関誌の論文成果を名古屋の生物多様性コミュニティの外にいる人たちに十分に情報発信できていないと感じていました。このため機関誌のコンテンツをCiNii(国立情報学研究所学術情報ナビゲータ)に登録して、論文ごとにDOI(デジタルオブジェクト識別子)を取得する手

続きも進めています。今後は、生物多様性に関して独自の取り組みをしておられる企業、民間団体、高校理科部、自治体の関係者などに投稿の依頼をすることも、編集会議で議論していきたいです。

この記念誌に書かれているように、センター・協議会の活動は、設立から10年を経て、かなり活発化し軌道に乗っていると思います。しかし、生物多様性をめぐる情勢はどんどん動いており、センター・協議会には、国や他の自治体、さらには外国の最新情報も取り入れながら、社会が求める生物多様性のあるべき姿をさらに追求していく役割が求められます。そのためには愛知県や近隣市町村の生物多様性部門との協働や交流をもっと活発化させてもいいと思いますし、生物の出現情報をGBIF(地球規模生物多様性情報機構)へデータ登録することで国際貢献の一翼を担うことも望めます。調査研究の新しい方法もGIS(地理情報システム)、バイオテレメトリ、DNA解析などいろいろ出ていますので、可能な限り貪欲に取り入れて欲しいです。生物標本が今後センターに蓄積されますので、いわゆる学芸員の素養を持った人材の育成も必要です。

新しいことに挑戦しようとする、センターの専門員・推進員や協議会の皆さんがそれを学んで身につけるだけの余裕を持つことが必要ですし、事務職の皆さんの理解とサポートも大切になってきます。近年、専門員から大学等に移ってキャリアを続ける方が何人か出ているのは大変心強いと感じます。それによって人材が流動化し、センター・協議会の周辺に人的ネットワークが形成されます。ただ私見ですが、専門員・推進員の皆さんの貢献は、労働待遇という点でもっと評価されてもいいように思います。最後に、企業連携・協賛を積極的に進めたり、事業へのご寄付や助成金を受け入れる体制を整えることで、センター・協議会の活動を支えている資金的基盤をさらに強化して欲しいと思います。

このように欲を言えばきりがありませんが、センター・協議会の20周年を祝うことができるように、私も微力を尽くしたいと思います。